

序論の図

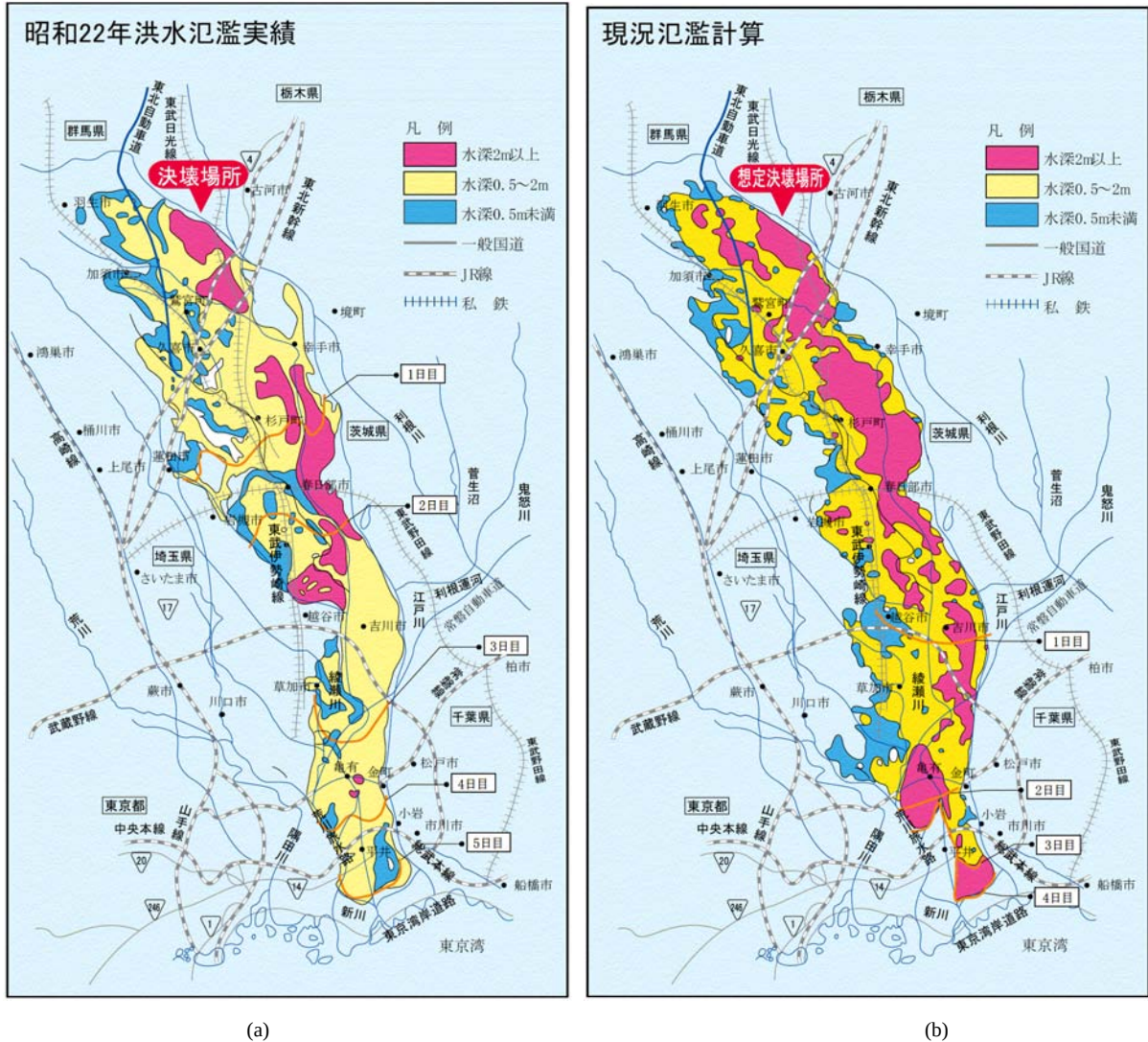


図-1 (a)昭和 22 年カスリーン台風の際の洪水氾濫実績と(b)現況氾濫計算⁴⁾

最大浸水面積 27,630(ha)
最大浸水量 $324,365 \times 10^3(m^3)$

→ : 破堤箇所
⇨ : 水門開放箇所
— : 海岸保全施設

最大浸水深
(単位:m)
 5.0m以上
 2.0m以上 - 5.0m未満
 1.0m以上 - 2.0m未満
 0.5m以上 - 1.0m未満
 0.5m未満

0 5 10
km

○シナリオF計算条件

- 本想定では、東京湾沿岸部分からの越波・越流等による浸水を計算したものであり、河川堤防からの氾濫浸水及び排水は考慮していない。

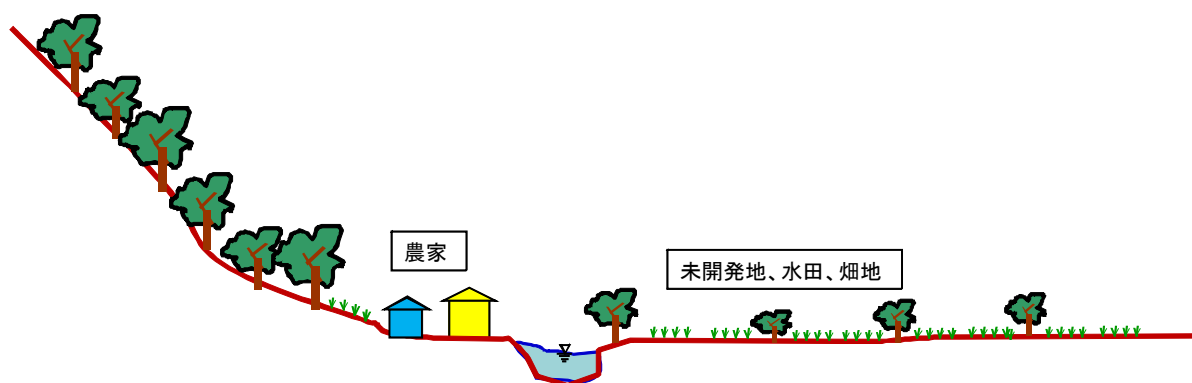


図-3a 近代的開発前の状態（内陸部）

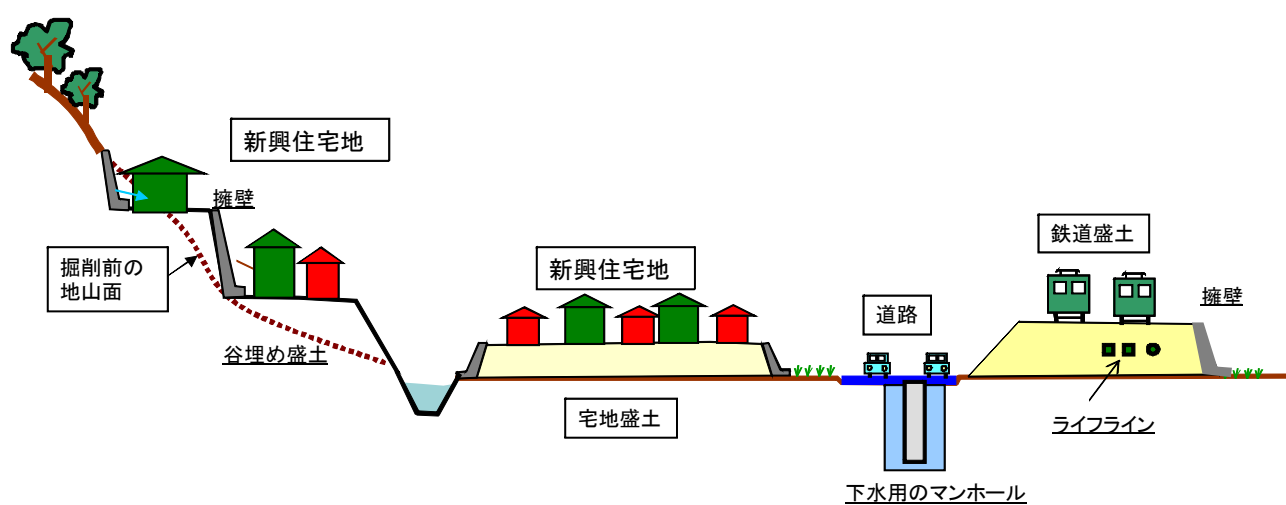


図-3b 近代的開発後（内陸部）

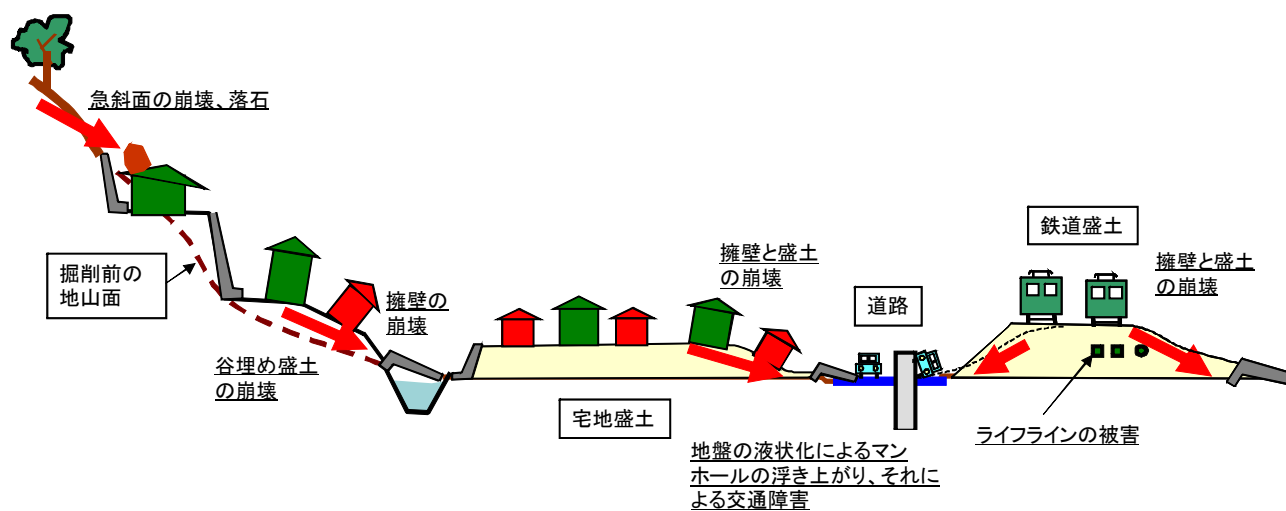


図-3c 近代的開発後における様々な地盤災害（内陸部）

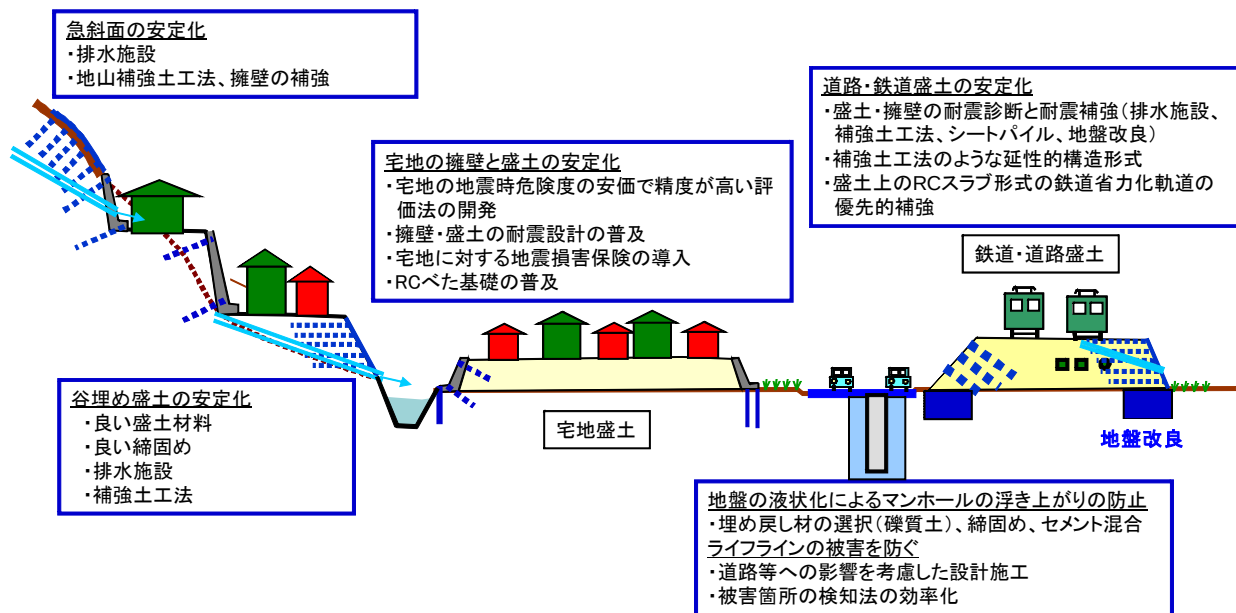


図-3d 地盤災害を防ぐための地盤工学の技術（内陸部）

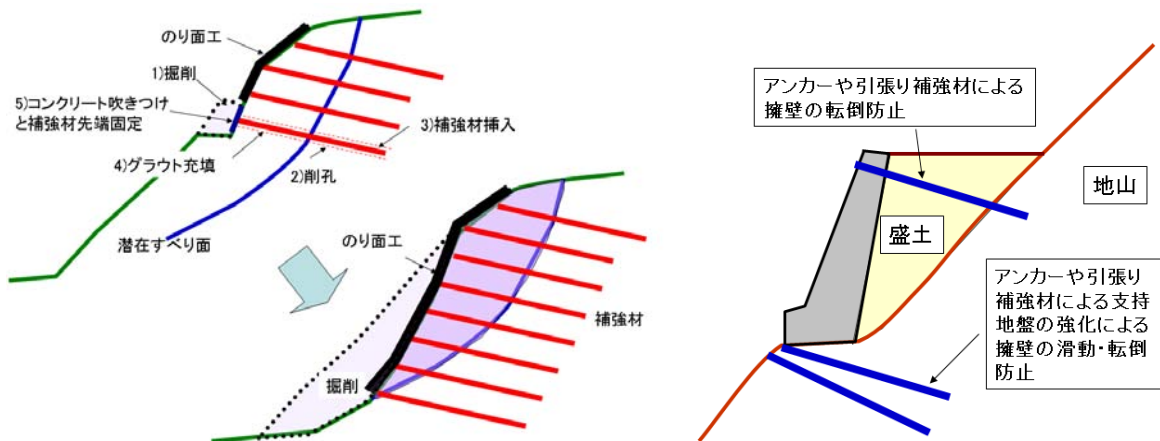


図-3e 図-3d の補完図 地山補強土工法による斜面と擁壁の安定化の例

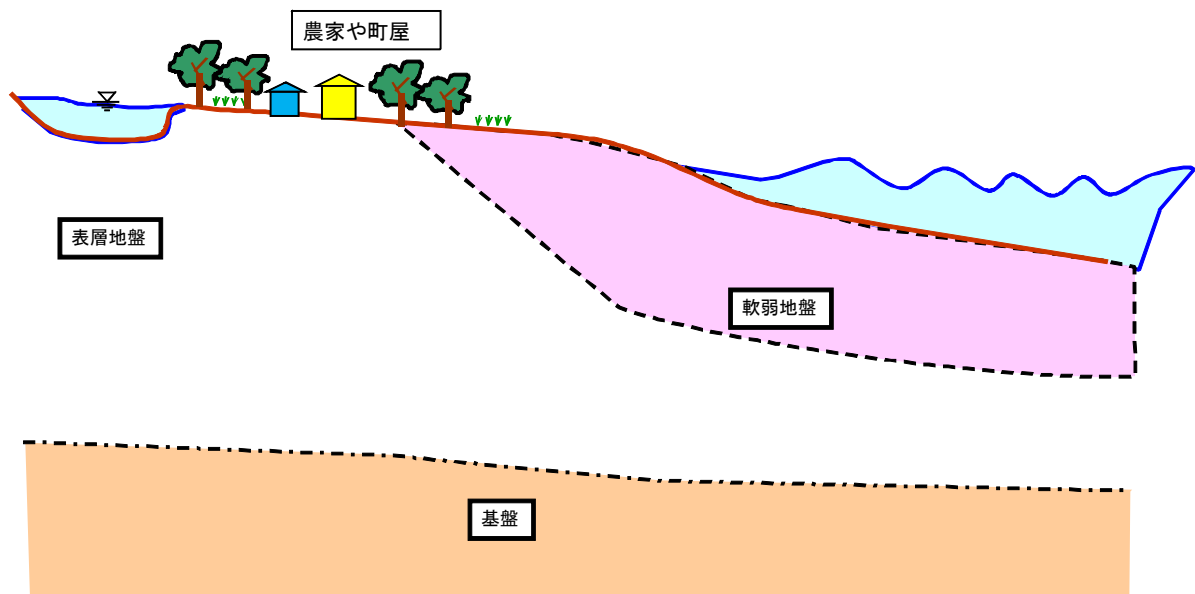


図-4a 近代的開発の前（沿岸部）

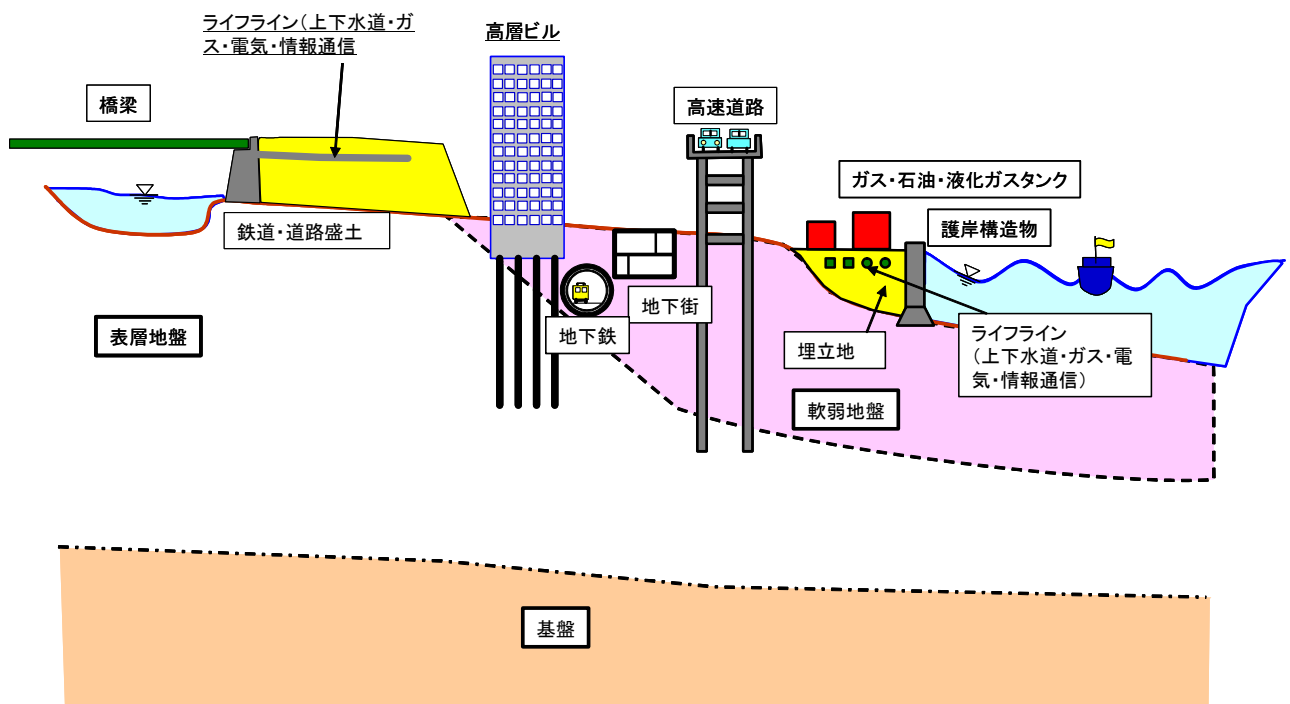


図-4b 近代的開発の後（沿岸部）

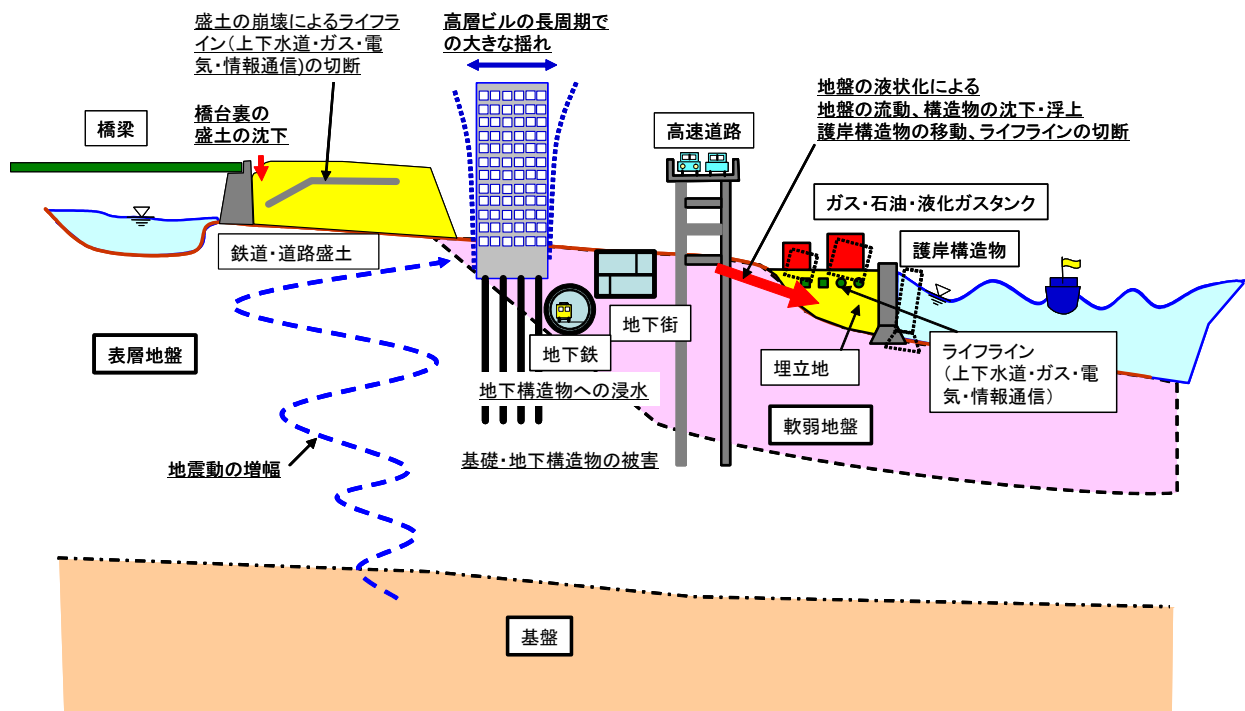


図-4c 近代的開発の後における様々な地盤災害（沿岸部）

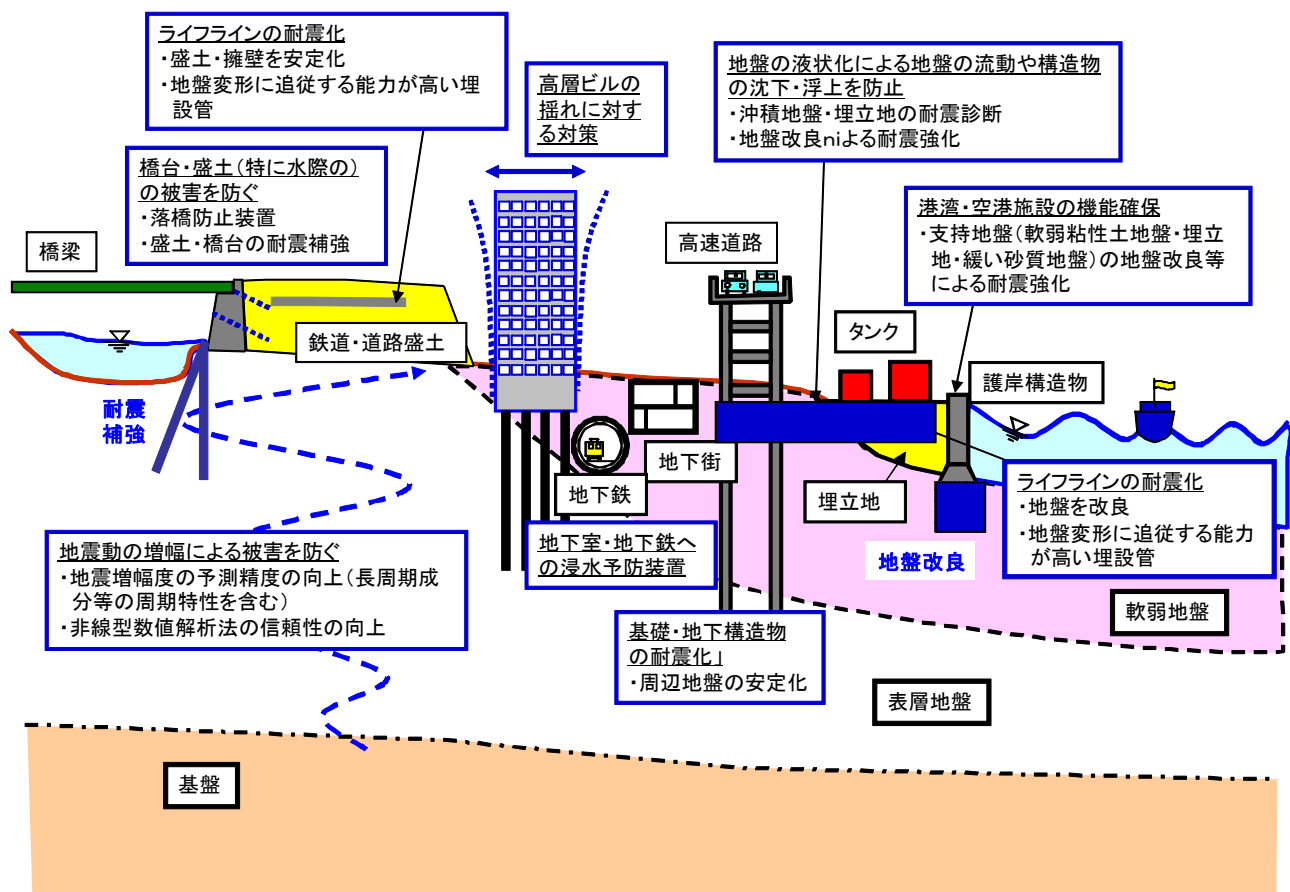


図-4d 地盤被害を防ぐための地盤工学の技術（沿岸部）

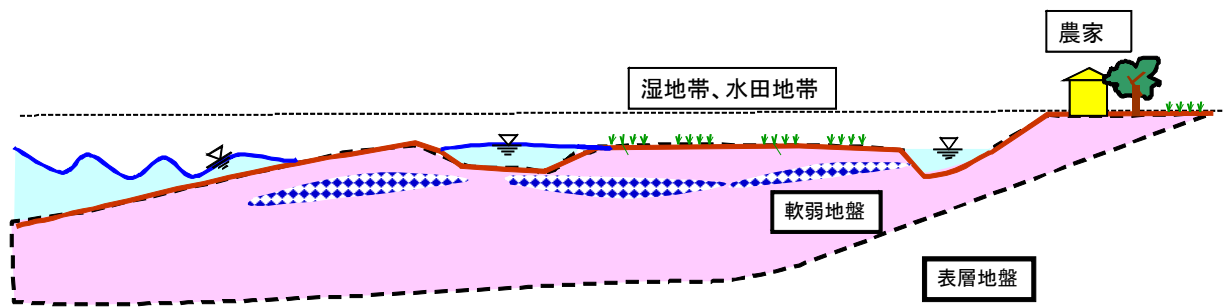


図-5a 近代的開発の前（低地部）

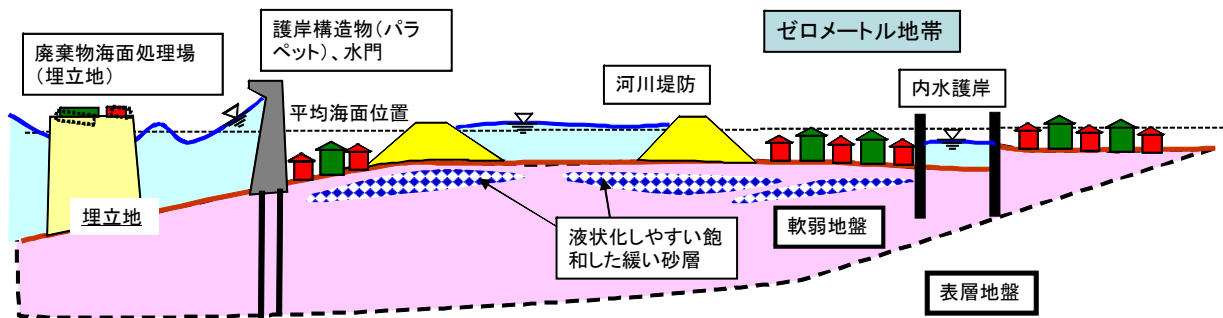


図-5b 近代的開発の後（低地部、既に地盤沈下が生じた後）

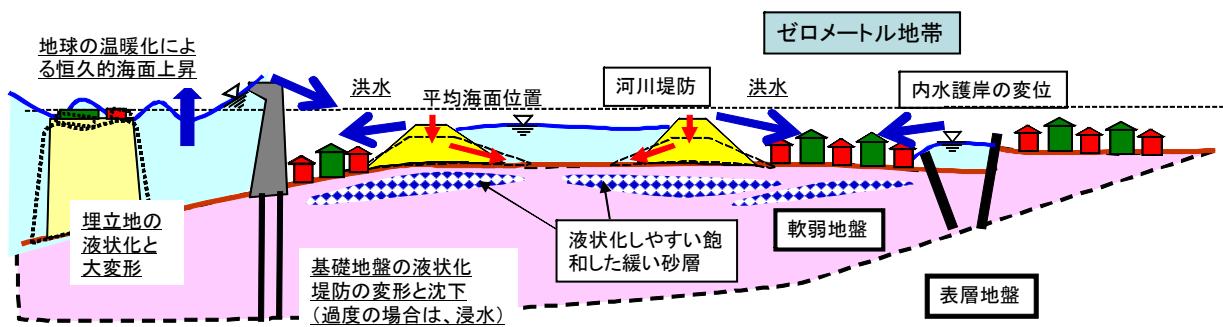


図-5c 近代的開発の後での様々な地盤災害（低地部）

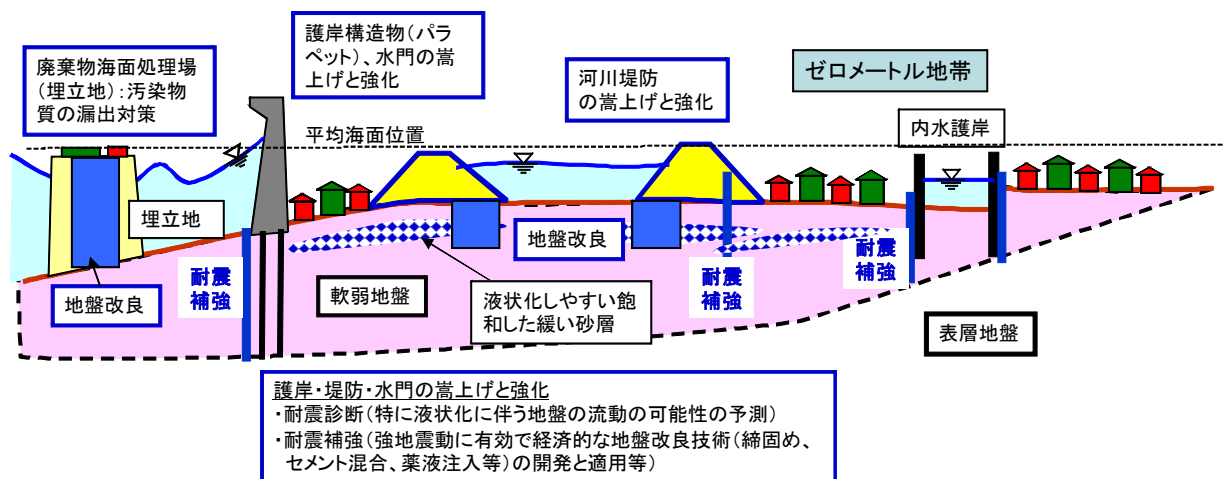


図-5d 地盤被害を防ぐための地盤工学の技術（低地部）

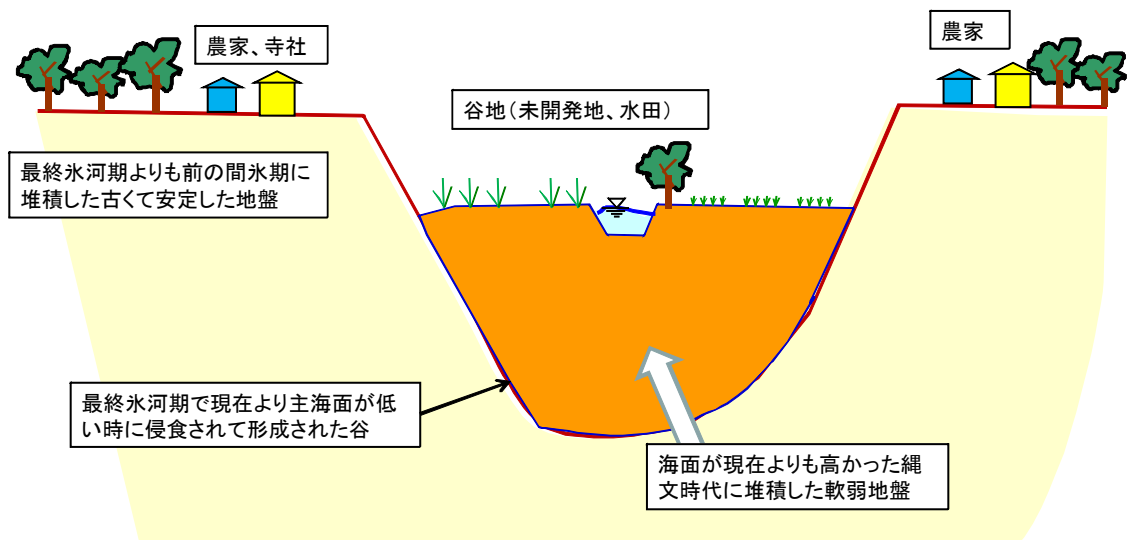


図-6a 近代的開発の前（谷地地形）

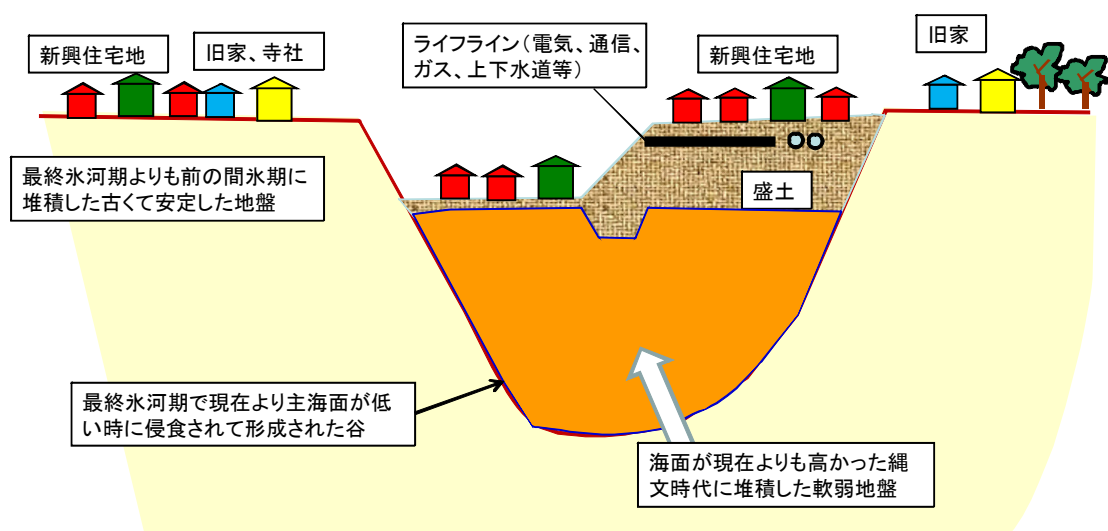


図-6b 近代的開発の後（谷地地形）

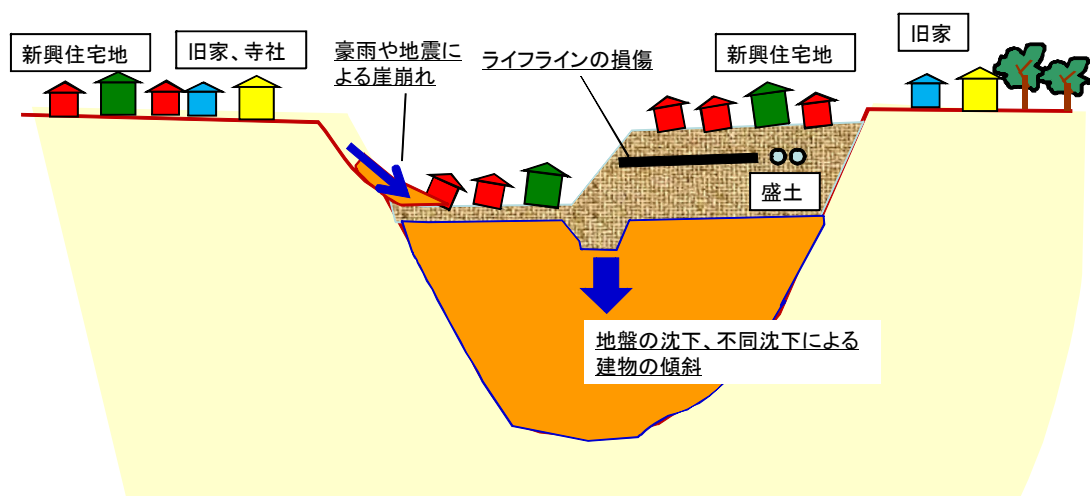


図 6c-1 近代的開発の後における様々な地盤災害（谷地地形）

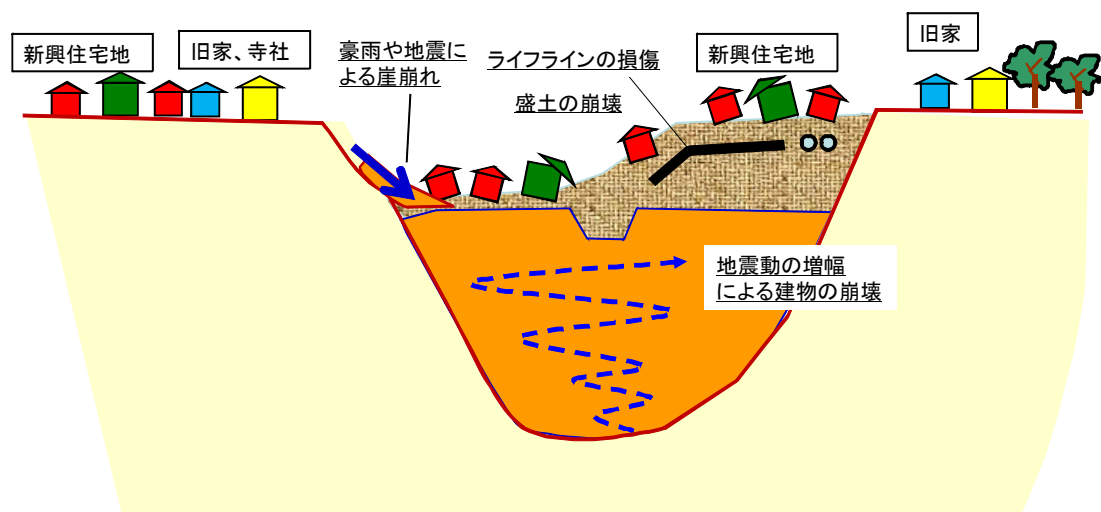


図-6c-2 近代的開発の後における様々な地盤災害（谷地地形）

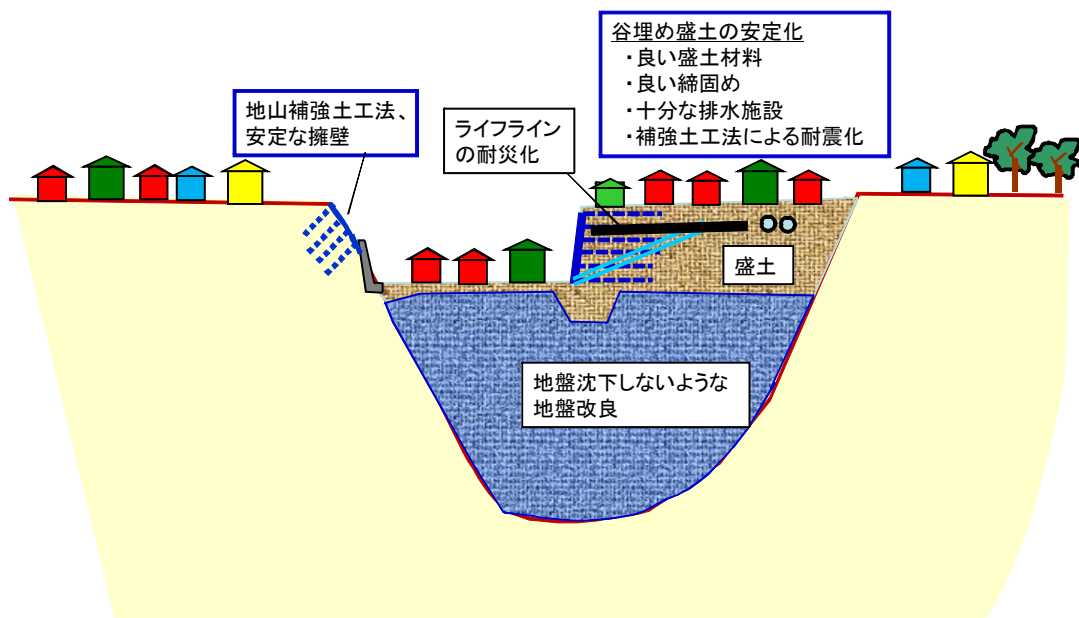


図-6d 地盤被害を防ぐための地盤工学の技術（谷地地形）

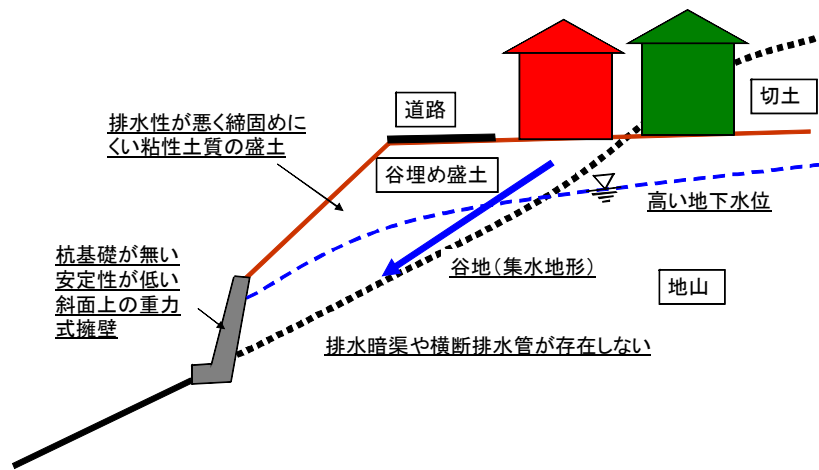


図-7a 谷埋め盛土の宅地での地盤工学上の諸問題



図-7b 2004年新潟県中越地震における高町団地での被害例

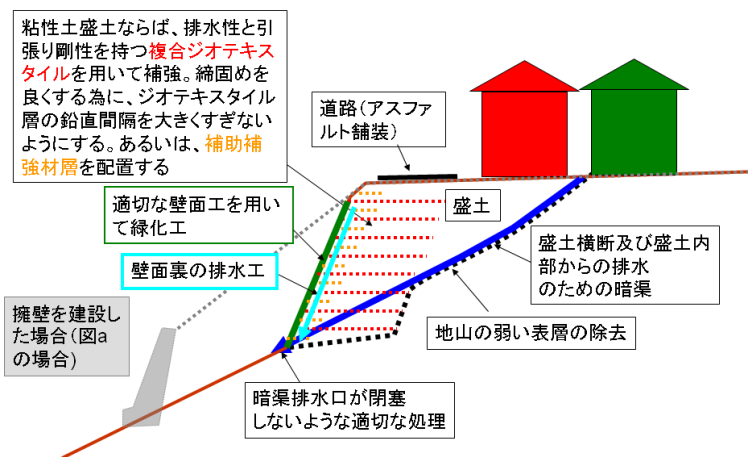


図-7c 図-7a の場合の宅造盛土を耐震化した谷埋め盛土の例